

【学部学科】

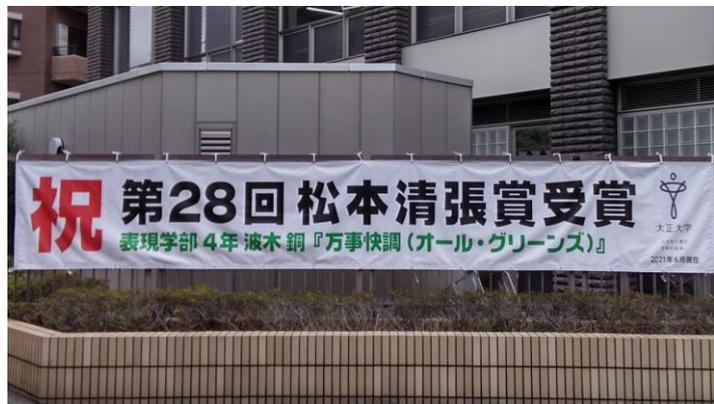
文学部から分立し、表現学部が新設され、文学部表現文化学科から表現学部表現文化学科となつて二二年目の年度となった。榎本了志学部長の下、コースの再編が実施され、今年度から新コースが第二学年より本格的に始動した。令和二年度からコース別に学生を取らなくなったため、二年生からこの新コースに分れる。

昨年度から導入された四期制クォーター制も、一・二年の二つの学年で運用された。三・四年生は二期制のセメスター制である。

四月一日に入学式が行われ、ガイダンス期間を経て、四月一五日より対面で授業が開始。二週目に入ったところで東京都に緊急事態措置が発令（四月二五日から五月一日まで）されたため、今年度も即座の対応が必要となった。本学はGWを含め、半月の休校期間を実施となった。この間、大学は急遽、全教室にカメラを設置し、黒板や教室内をZoomで配信できるようにした。これにより、対面希望者とオンライン希望者を同時展開するハイブリッド形式がすべての教室で可能となり、全授業ハイブリッドで五月二日から授業が再開された。表現学部は昨年度秋学期から対面再開後Zoomで同時配信もしていたので、ハイブリッド形式で積極的に対応した。春学期は八月まで延長になったが、冬季のウィルス流行に対処するため、学年暦は年内に授業を終了する形になっており、短い夏期休業を経て、九月二日から秋学期が開始となった。

このようにコロナ禍で緊喫の対応を求められる中でもあつても、各コースは出来る限りの活動をし、成果を残した（詳しくはコース報告を参照）。学生の活動もめざましく、博報堂プロダクツやTBSスパークルなど、各コースの就職活動も善戦している。

学生の活躍も、瞠目すべき活躍が続き、四年生の波木銅さんが第28回松本清張賞を『万事快調』で受賞した。七八八篇の中から四次の選考を経ての受賞である。京極夏彦・辻村深月・中島京子・東山彰良・森絵都の選考委員満場一致の堂々の受賞となった。大学生の受賞は史上二人目となる快挙でもある。波木さんは放送・映像表現コースの四年だが、クリエイティブライティングコースの額賀澤客員准教授（第22回松



本清張賞受賞の授業を受講しており、松本清張賞に応募する契機となつてもいる。文芸同好会に所属し、アカデミックコンテストにも応募し、クリエイティブの他の授業も受講するなど、文芸に関する創作意欲も並々ならぬものがある。松本清張賞授賞式には額賀先生も駆けつけてくれた。

卒業生でも第47回新沖縄文学賞の正賞をクリエイティブライティングコース卒業生（令和元年度卒）の円井定規さんが『春に乗り遅れて半額シールを貼られる』で受賞した。クリエイティブライティングコースでは、公認会計士に合格する卒業生（二八年度卒）などの嬉しい報告もあった。

放送・映像表現コース卒業生（二八年度卒）の高村安以さんが第37回ATP（全日本テレビ番組作者連盟）賞テレビグランプリにおいて奨励新人賞を受賞した。どれも嬉しい報告である。

昨年度は中止せざるを得なかったアカデミックコンテストも今年度は復活。未曾有のウィルス流行を前に長期の対応を余儀なくされているが、高等教育機関として最善の道を取るべく、日々努力している。

【学科一学年】

○令和三年度

新入生は二二五名。昨年度よりコース別の入学者ではなく、学科としての入学者のため、二年度に進級の際、四コースに分かれる形となった。

昨年度に続き、表現基礎ゼミナールⅠ・Ⅲ・Ⅴはセルフマーケティングを基礎とした領域で、川喜田尚任期制教授・松崎泰弘任期制教授・外川智恵任期制教授に第1・2・4クォーターで担当していただいた。ここで表現学部の学生としての全般を網羅した学修を学んでもらう。

表現基礎ゼミナールⅡ・Ⅳ・Ⅵは各コースの入門講座に位置付け、第1・2クォーターを展開し、歌田明弘任期制教授・山田潤治准教授・徳永直彰准教授・北川仁任期制専任講師・ヨシムラヒロム助教に基礎ゼミⅡを、Ⅳは北川先生に代わり松崎泰弘任期制教授が担当、Ⅵは松崎先生に代わりの場眞唯専任講師が担当され、第4クォーターではコース別の授業も展開した。昨年度より第一学年の専門のⅡ類科目は、表現基礎ゼミナールⅠ～Ⅵのみとなったため、如上の展開となった。

【クリエイティブライティングコース】

【情報文化デザイン(文芸)コース】

○令和三年度

学科改革のため一年次はコースに分かれず学科所属となる。情報文化デザイン(文芸)コースは二年生三名、クリエイティブライティングコースは三年生二名、四年生三四名で、二・三・四年生で計九七名となった。

令和二年度の就職率は七三・九%(令和三年三月卒、令和三年五月時点)となった。

ここ数年、卒業後の生活設計に際し就業と創作活動の両立につき深慮する学生が増え、就職活動に熱心な学生が増加しているもの、コロナ禍の影響はやはり大きく、苦戦している。そのような状況の中、卒業生から第四十七回新沖縄文学賞の受賞者(令和元年度卒、円井定規『春に乗り遅れて半額シールを貼られる』や公認会計士合格者(平成二十八年度卒)が出たことは喜ばしい。

人事異動としては、四月一日より徳永直彰専任講師が准教授に昇格。内田春菊・金原亭世之介・芳賀直子の三客員教授はカリキュラム編成の関係でアート&エンターテインメントワークコースへ異動となった。

スタッフは、中村亮二教授、森晴彦教授、教務主任・徳永直彰准教授、中島紀子専任講師、長藪安浩特命教授、井沢元彦・後藤国弘・サエキけんぞう・江藤茂博各客員教授、笹公人・額賀滯各客員准教授の先生方に担当いただいた。非常勤講師は、長谷川哲夫、小川敏栄、川勝麻里、高橋秀城、東順子、名嘉真法久、齋藤秀昭の先生方に引き続き授業を担当いただいた。就職の力リスマと呼ばれる海老原嗣生特命教授、魚尾和瑛・北林茉莉代・坂巻理恵子非常勤講師の四名を新たにお迎えした。

授業に関しては、対面とオンライン併用のハイブリッド授業を展開、設備面で様々な課題もあったが、教員・チューターの充実した協力体制で対応し、大学教育として

の水準を維持することができた。本年度より二年次第三クォーターでのPBLが開始となり、「もう一つの街物語」という学科全体のテーマに沿い、日本近代文学の作家である夏目漱石・芥川龍之介・小泉八雲・森鷗外・太宰治・江戸川乱歩を取り上げ、グループに分かれて作家ゆかりの街や作品に登場する街、関連文学施設などのフィールドワークを実施、その成果をグループレポートとしてまとめた上で、各人がそれをふまえた小説作品の創作をおこなうという授業を展開、成果物を収録した冊子を制作した。コロナ禍の状況下でのフィールドワーク実施は様々な制限を余儀なくされたが、グループ内での役割分担・分散フィールドワークなどで臨み、無事終了できたことも成果といえる。

【出版・編集コース】

【情報文化デザイン(編集)コース】

○令和三年度

令和二(二〇二〇)年度のコース再編によって、二年生二名は情報文化デザイン(編集)コース、三年生三三名と四年生三三名は出版・編集コースの所属となった。

前年度に続き新型コロナウイルスのなかで授業することを余儀なくされたが、今年度は対面とオンラインを学生が選択するハイフレックス型の授業となった。多くの学生はこれまでマック教室で制作を行っていたが、前年度一月末より大学がアドビ・クリエイティブ・クラウドを学生自身のパソコンにインストールして使えるようにしたため、いつでも制作進行することができるようになった。それによって、学生の制作レベルが格段と上がった。また授業についても、これまで多くの授業時間をマックの作業にあてざるをえなかったが、制作は、事前学習・事後学習としても進めることができるようになった。

今年度より第三クォーターは二年生までPBLの期間となった。二年生は学科全体が「もう一つの街物語」というテーマのもとに活動したが、本コースの学生は三人もしくは四人からなる十のグループに分かれ、このテーマに沿った特集をそれぞれ考え取材し、雑誌記事を制作した。学生が考えた特集は次の通り。「昔の日本 日本にある異国」「アートと共存する街、TOKYO」「夜の東京特集 もう一つの街の顔を辿る」「世代別に見る街」「都内で出会う8地方の味」「虫や植物、犬から見る世界」「都会と田舎の定義って?」「街中の発見 建物・看板・壁特集」「今っぽい街 レトロな街」

「もう一つの街歩きレポート鎌倉編」。このようにバリエーションに富んでいた。PBL期間に森枝卓士客員教授の写真の指導を受け、取材対象の街に何度も足を運び撮り直した学生が多かった。岡本洋平客員准教授、宮吉知恵子非常勤講師の指導を受け、デザイン面も大きく改良された。企画や文章、制作進行のアドバイスは専任教員がしたが、学生の制作水準が例年より高くなった。

第三クォーターで各自八頁見当の記事を作成し、第四クォーターは、特集グループごとに記事を合体し、各自それに表紙と目次を加えて自分の雑誌を完成させた。次の学年ではそれをウェブ化し、紙とデジタルの制作の違いを体得してもらった予定である。授業進行が大きく変わり、制作には時間がかかることもあって円滑に進めることができるか心配したが、多くの教員がかかわり、学生の頑張りもあって、第三クォーターのPBLを中心として、新体制初年度は順調に進めることができた。

令和三年度の就職率は一月段階で八九・七％である。前年度も最終的には九五・七％とほとんどの学生が就職できたものの一月段階では五〇・〇％と近年にない悪い状況だったことからすれば、大幅に改善されたことになる。今年度顕著だったのは、比較的早くに内定を得る学生が多かったことだ。八月末の段階で五七・七％と半数以上の学生が内定を得ていた。就職について意識の高い学生が多かったことに加え、コロナ禍で就職状況が悪いことを知って危機感が強かったためもあると思われる。

専任教員は、大島一夫任期制教授、歌田明弘任期制教授、佐藤哲至任期制専任講師の三名。コース教務主任は大島教授に代わって歌田が担当した。客員教授はくらたまなぶ氏・森枝卓士氏・渋谷和宏氏・仲俣暁生氏。客員准教授に岡本洋平氏。非常勤講師は宮吉知恵子氏・三浦崇典氏。佐藤壮広氏は前年度末で退職された。

佐藤哲至専任講師が担当する情報文化デザイン研究E:3（第四クォーター）では、学生たちは、デジタルプロダクトの企画、制作に関する一連の流れを学んだ。図解を含むウェブサイトを作る課題に取り組み、色彩、楽器、野菜など学生たちはおもいおもいのジャンルの企画をたて、目に見えない仕組みを、わかりやすく視覚化して解説するためのウェブサイトの制作に取り組んだ。第七回（二月一三日）では、リクルートのUI/UXデザインナー竹内裕和さんによるオンライン講座がおこなわれ、デジタルプロダクトを作るときのUI/UXデザインのポイントや紙とデジタルの違いなどに関する講義をしていただいた。学生からの質疑にも丁寧な回答をいただき、実際の現場でUIデザインがどのように使われているかについて学んだことで、デジタル

分野への関心が高まったという学生が増えたことが、アンケート結果からも確認できた。

【放送・映像表現コース】

○令和三年度

令和三年度は、二年生七五名、三年生七九名、四年生八三名、計二三七名となった。令和四年三月に卒業する放送・映像表現コース学生の就職は、TYO、博報堂プロダクツ等々、様々な業種で例年以上に大手企業への内定獲得者を輩出した。また、松本清張賞受賞者も輩出し、コース設立以来最高の実績となる飛躍の一年であったといえる。

授業に関しては、対面授業とオンライン授業のハイブリッド型であったため、とりわけ実習に関して強い規制がかかり、難しい運用を迫られた。しかし、学科教員、学科スタッフらの協力を得て、学生からの不満を最小限におさえながらの運用を行うことができた。

今年度から二年生のⅡ類科目がクォーター制に移行したため、とりわけ第三クォーターがPBLになるなどの新しい運用で各種対応が生じたが、予算を用いたより実践的な授業を展開することができたと考えている。また、前年度に引き続き、インターシップの紹介と相談、就職活動の準備のためのキャリアサポートを行った。

三年生と四年生のワークショップも前年度から引き続き二カ年におよぶ通年クラスでの授業を展開し、卒業制作によって学びを仕上げるだけでなく、就職率の維持向上のため就職支援体制の一層の強化を図った。

毎年開催している卒業制作展と成果報告展は、感染防止対策を講じた上で、来場とオンデマンド方式のハイブリッド型にて開催の予定である。なお、来場者は本コースの学生のみとする見込みである。

スタッフは、昨年度に引き続き北川仁任期制専任講師が教務主任を務め、松崎泰弘任期制教授、的場真唯専任講師、田島悠史専任講師、四名の専任スタッフ。特命准教授に六車俊治氏。客員教授に荒川祐一氏、伊勢田誠治氏、中山浩太郎氏、三浦光博氏、吉田守良氏。客員准教授に大平雅美氏。非常勤講師を野間口修二氏、川原伸一氏、池本哲也氏、北川斉氏、山本圭太氏、吉木崇氏、新里尚平氏、野辺優子氏、表現文化学

科から放送・映像メディアアコースの非常勤講師にご着任いただいた坂口真理子氏、新
たにご着任いただいた中澤雄大氏にご担当いただいた。

【英語表現・コミュニケーションコース】

○令和三年度

令和三年度、表現学部表現文化学科英語表現・コミュニケーションコースに在籍し
ているのは、二年生が一名、四年生二七名、の計二八名である。第二学年の学生一名
は、留年のため文学部人文学科国際文化コースの二年生とともに受講の予定であつた
が、授業はすべて欠席であつた。英語表現・コミュニケーションコースは本年度を持
つて最後の在籍者となる。三年生以下の学生は文学部人文学科国際文化コースの中
英語の専攻として、今までの英語表現・コミュニケーションコースの教育内容を中心
とした新しいカリキュラムの元で学んでいる。

教員体制は、西蔭浩子特任教授、行森まさみ専任講師の二名であり、コース教務主
任は西蔭浩子特任教授が就いた。非常勤講師としては内藤栄子、寺坂有美、レスリー・
コーブランド、マーク・ストンバークの四名体制となつた。

昨年来のコロナ禍で、授業はハイブリッド授業となり、対面授業かオンライン授業
のいずれかを学生が選択し、受講した。クラスによってはオンライン授業希望の学生
が多く、未だ教育現場への影響は大きかつた。

実施が可能となつた行事は、TOEIC-Listening & Reading IPの春秋の年二回のオン
ライン受験である。オンライン受験は、一定の受験期間を設け、その間に学生が自宅
でオンライン受験が可能となつた。しかしながら、対面での一斉受験ではなかつたた
め、全員に受験を徹底させることはできなかった。

第一回 TOEIC Listening & Reading IPは、七月一日～七月一日を受験期間の二
週間の期間の受験を可能とした。第二回 TOEIC Listening & Reading IPは、一月
二六日～二月九日の二週間の受験期間とした。

昨年に引き続き実施できなかった行事は、毎年行ってきた海外研修二つである。一
つは、オーストラリア英語研修である。ホームステイをしながら南クイーンズランド
大学で文化と英語研修は、オーストラリアが国を閉鎖し、留学生を受け入れない状況
下で断念せざるを得なかつた。また、シンガポール英語ビジネス研究も、受け入れ企
業の都合により中止となつた。

教職を履修していた三人が、それぞれ三週間の教育実習を行った。葛飾区立堀切中
学校（一名）、市川市立妙典中学校（一名）、羽村高等学校（一名）で英語教師として
教壇に立つて生徒指導を行い、各学校の指導教官から高い評価を受けた。
四年生は七月に卒論の中間発表会を行い、卒論の進捗状況を発表する予定であつた
が、中止した。

英語表現・コミュニケーションコースの最後の卒業生となる二六名が卒業論文を提
出し、受理された。成果をもとに、二〇二二年二月二四日と二七日に口述試験が行わ
れる。恒例のプレゼンテーションの形で卒論の内容を発表することは中止し、個別の
面談による試験になつた。

四年生の岩田匠は、昨年八月にハワイ大学協定留学生として一年間ハワイ大学に留
学する予定がコロナのために延期され、二〇二二年八月に、ハワイ大学への留学の夢
を実現させることができた。そのため、岩田は、二〇二二年六月に留学を終えて帰国
し、卒業論文を提出し、九月の卒業をめざす予定である。

【エンターテインメントビジネスコース】

【アート&エンターテインメントワークコース】

○令和三年度

四年三月に、エンターテインメントビジネスコース六期生四六名が卒業した。今年
度は、アート&エンターテインメントワークコースの二年生六六名、エンターテイン
メントビジネスコース三年生五二名、同四年生四七名とあわせ、両コース在籍学生数
は、一六五名となつた。

コーススタッフは、

川喜田尚任期制教授 外川智恵任期制准教授 山田潤治准教授 中島和哉任
期制准教授

客員教授 椎名和夫氏 蛭川有紀氏、内田春菊氏、荒川祐二氏、金原亭世之介氏、

高橋啓祐氏

客員准教授 芳賀直子氏、山口典子氏

講座担当者 江野澤哲也、菅沼 徹、菅家ゆかり、北野信高、栗岡靖子、小林巨和、

田中慈乃、中川悠、根本陽平、林 寿美、松崎泰弘、望月純吉、マイケル・キャッ
ドマン、の各氏

*

春学期および第一、第二クォーターは新型コロナウイルス (COVID19) 感染を避けるために対面とリモートによるハイブリッド授業となった。新型コロナウイルスの感染リスクの高い冬季の開講を避けるため全学、秋学期および第三クォーターが前倒しされ、卒論提出も十二月中旬までに完了した。

六月十九日、コース所属の全学生を集めて、第六回卒業論文中間報告会をリモートで実施した。午前中から夕刻まで、四年生および三年生全員が卒業論文の中間報告をおこない、聴衆からの質疑に応答した。

ワークショップ・ソーシャルデザイン基礎では、社会課題の解決を企業・団体と追究した。本年度は食育 (21世紀構想研究会・大槻臨床研究所)、シェアリングエコノミー (キャップクラウド株式会社・株式会社プラスロボ)、情報格差是正 (ソフトバンク株式会社・オンコロジー教育推進プロジェクト) の協力を得た。また、本授業から派生した社会課題解決ゲーム製作活動は二年目を迎え、学内奨学金を得て継続している。専門ゼミナールⅠ、Ⅱ (外川ゼミ) はNTTデータ経営研究所との共同研究が二年目を迎えた。訪日外国人の情報格差是正と再訪率の向上を追究している。

専門ゼミナールⅠ、Ⅱ (川喜田ゼミ) では、公益信託高橋信三記念放送文化基金の助成を受け、ラジオのポジションニングについて研究を行い、民放歴史を拓いた中部日本放送役員、編成部長らにプレゼンテーションを実施、高く評価された。

また専門ゼミナールⅠ、Ⅱ (中島ゼミ) では、大阪の人気アイドルグループNMB48のニューシングル『シダレヤナギ』の認知拡大プロモーションの提案を行った。それと並行して、国内大手パチンコメーカー35社から構成される業界団体「日本遊技機工業組合」と提携し、「パチンコパチスロイメージ向上プロジェクト」の共同研究にも取り組んだ。学生独自の調査・分析に基づいた施策提案は各パチンコメーカー役員・宣伝部長から高評価を受け、提案内容の実施に着手することとなった。

エンターテインメントビジネスコース第六期生四六名が卒業論文を提出し受理された。成果をもとに、令和四年一月一日、一二日、一三日の三日間にわたり、卒論報告会・口述諮問を開催、全員が卒業論文内容のプレゼンテーションを行おこなった。

一月十八日、第七回学内プレゼンテーション大会を対面とリモートによって開催。コースから二年生七チーム、産学連携プロジェクトチーム、三年生の専門ゼミから三チームが研究成果を披露した。

【街文化プランニングコース】

○令和三年度

令和三年度は、二年生七名でスタートとなった。新設コースのため、一年を除くと、二年生しか在籍していない。学生募集の段階であったコースではなく、入学後、設置されたコースでもあり、認知度が少ない中、街文化に魅了された少数精鋭が志望してきた。意欲的な学生が揃った学年である。第三クォーターでは学内で展示を行い、多くの人に鑑賞をしていただいた。

スタッフは、榎本了孝学部長、ヨシムラヒロム助教、サカキテツ朗客員教授、ヴィアン佐藤客員教授に加え、中島和哉任期制准教授兼、田島悠史専任講師兼が授業を担当した。

【学科研究室】

○令和三年度

五月三二日をもって、村尾盛朗が教務課へ異動。チューターは蓮本ゆう子、妻神諒、福田航星三名に加え、新しく要まいが着任 (六月一三日付)。

【学部学科の取組み】

○PBLⅠ (第二クォーター)

第一学年は二度目の第3クォーター、PBLⅠの授業を迎えることになった。今年度はコロナ禍対策で令和三年一二月内に第4クォーターを終了する学年暦のため、九月二日 (木) から一〇月二日 (木) までが第3クォーターの期間となった。

六月中から榎本学部長・森学科長と学科事務室が準備を進め、年度当初から学部教授会に諮り、先生方と調整をしながら、一〇月一日 (金) に光とことばのフェスティバルを開催することとなった。

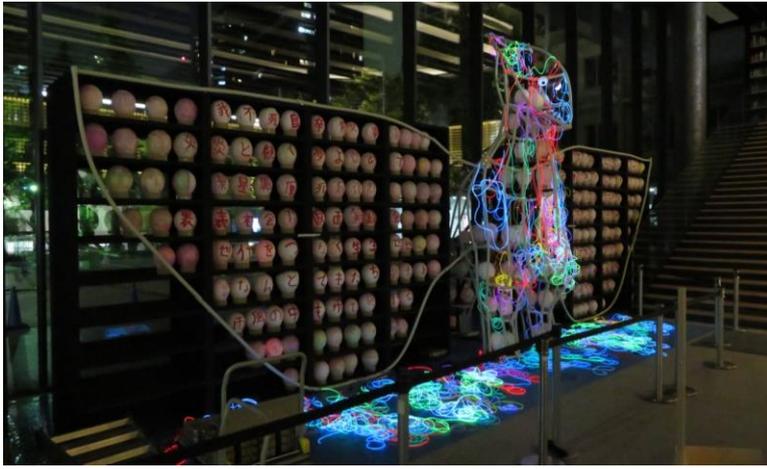
第3クォーターの内容・時間割を夏前に一年生に発表。九月二日に一年生ガイダンスを行い、開始された。今年度も昨年度に続き、光とことばのフェスティバル実習と導入ワークショップを同時に展開する七週間となった。以下、それぞれについて記す。

なお、今年度も学部長・学科長と学部学科専任教員全員の総力戦で取り組んだ。昨年度から第3クォーターの実習科目は、総合学修支援部が担当となり、同部の全面

的な協力の下、PBL Iの準備・運営を進めた。

＊第一二回「光とことば」のフェスティバル2021」

今回のフェスティバルは、スタート当初に立ち返ることを企図し、和紙で本体を製作することにした。しかしコロナ禍での制約のため、一人ひとりがんばり大の「クラゲねぶた」を和紙で二基作り、連続のことばを一基に記しメッセージを発信、もう一基は色和紙で装飾、赤色電飾で光らせる形とした。そしてそのクラゲねぶたの展示台は、榎本学部長のデザインによる火の鳥（フェニックス）であった。高さ最長四メートル、横八メートルに及ぶもので、新築のガラス張りの八号館に設置される企画となった。なお、和紙によるミニねぶたをクラゲねぶたとの命名も榎本学部長である。ここに三六〇個のクラゲねぶたが設置され、各段ごとにことばのメッセージが示されるわけである。なお、対面の学生は一人二基のクラゲねぶたを作ったが、一五%のオンライン希望者は、クラゲねぶたセットを送付し、ハイブリット授業で製作工程も教室と同時に展開することで、自宅で作成してもらったが、フェニックスに飾ることはできないため、Zoomにより画面に、ことばの順番にクラゲねぶたを映してもらい、それを連続で撮影し、オンラインチームの「ことば」を撮影する形を取った。なお、毎週のグループごとの製作過程は、ガモールTVが撮影し、ホームページに公開する形とした。



一〇月一五日（金）のフェスティバルは、安全対策のためグループごとに登校し、フェニックスに設置していく形となったが、一年生全員を集めて、フェスティバルを開催することは、ギリギリまで逡巡したが、やはり安全が第一ということで、設置時点からZoom 配信をし、リアルタイムに見て

もらう形になった。設置をしたら帰宅し、Zoomで参加する、という形式に拠らざるを得なかった。フェスティバルは、高橋学長のお言葉から始まり、最小限度の教職員の見守る中、開催された

＊導入ワークショップ

光とことばのフェスティバルの実習と並行して、「導入ワークショップ」を実施。第一・二・四クォーターの「表現基礎セミナーⅡ・Ⅳ・Ⅵ」で実施している各コースの概説と基礎力養成の延長・補完を目的とするワークショップを展開した。二年度以降のコース選択を視野に入れ、第3クォーター七回授業のうち、前半二回と後半三回で別々に、二種類のコース授業を選択できるようにし、七回目を総括とし、第4クォーターでの表現基礎セミナーⅥでの履修コースの選択へと継続させた。

光とことばのフェスティバルでの「協働」は、専門コースに進んで活用される基盤となる学び。想像力、企画力・協働力・創造力・運営力、どれを取っても、この学びは、将来のコースでの学びの基礎となるべきものと従来から位置付けている。その気づきを明確化するために「導入ワークショップ」では、専門科目の学びとの接続を試みている。学部の学びの基底を通して培うものを「光とことば」で実践し、どう活用していくかの学びの場も「導入ワークショップ」としてPBL Iの実習の中に組み入れているわけである。

○PBLⅡ（第二クォーター）

クォーター制への移行とともに、本年度より第二学年でも、第三クォーターにPBLⅡが導入された。学科PBLとコースPBLに二分し、両者が補完しあう相乗効果を企図した。

学科PBLは蛭川有紀客員教授と学科専任教員による「演じることの根源を知る」表現とは何か、演技を表象として、表現することの根源に迫ります」と題した特別講座。表現に関わる者として、自らの表現する根源について考察するべく、コースPBLと学科PBLの両輪をもって、二年次のPBLを、より立体的・構造的な学びにするための講座。自ら設定した表現課題を深化させるために、「演技」を通して人間の真相を理解する。（仮面）をつかった表現を通して、演じることの根源を知る。自らの作品を豊かにするために、「演技」の本質を理解するための講座。毎回、学科の先生方が複数参加するが、狂言方と泉流能楽師狂言師の九世野村万蔵氏をゲストに迎えた回は圧巻の迫力であった。また終盤の学生班の発表に至っては熱気あふれる意欲作が溢

れた。

コースPBLは、榎本了孝学部長に設定いただいた「もう一つの街物語」を学科共通のテーマとし、各コースの特性に沿った多種多様な学びに挑戦した。情報文化デザインコース（文芸）では、日本近代文学の作家ゆかりの街のフィールドワーク、それをふまえたグループレポートならびに個人創作を冊子にまとめた。情報文化デザインコース（出版編集）では、学生グループに分かれ学科共通テーマに沿った雑誌の企画・取材・編集・制作をおこなった。放送・映像メディアコースでは、学科共通テーマに沿った短編映画、ラジオ番組、パソコンアプリを活用した映像作品、フィールドワークによる冊子成果物作成などをおこなった。アート&エンターテインメントワークコースでは、「キツザニア」を取り上げた第七回映像祭の企画運営、大学魅力化推進部・広報部と連携した広報用素材づくり、図書館での調査なども加えた特定街区のフィールドワークとその情報発信コンテンツ制作などをおこなった。街文化ブランディングコースでは、街のフィールドワークをふまえた取材記事や創作作品をまとめた冊子制作、作品展示などをおこなった。